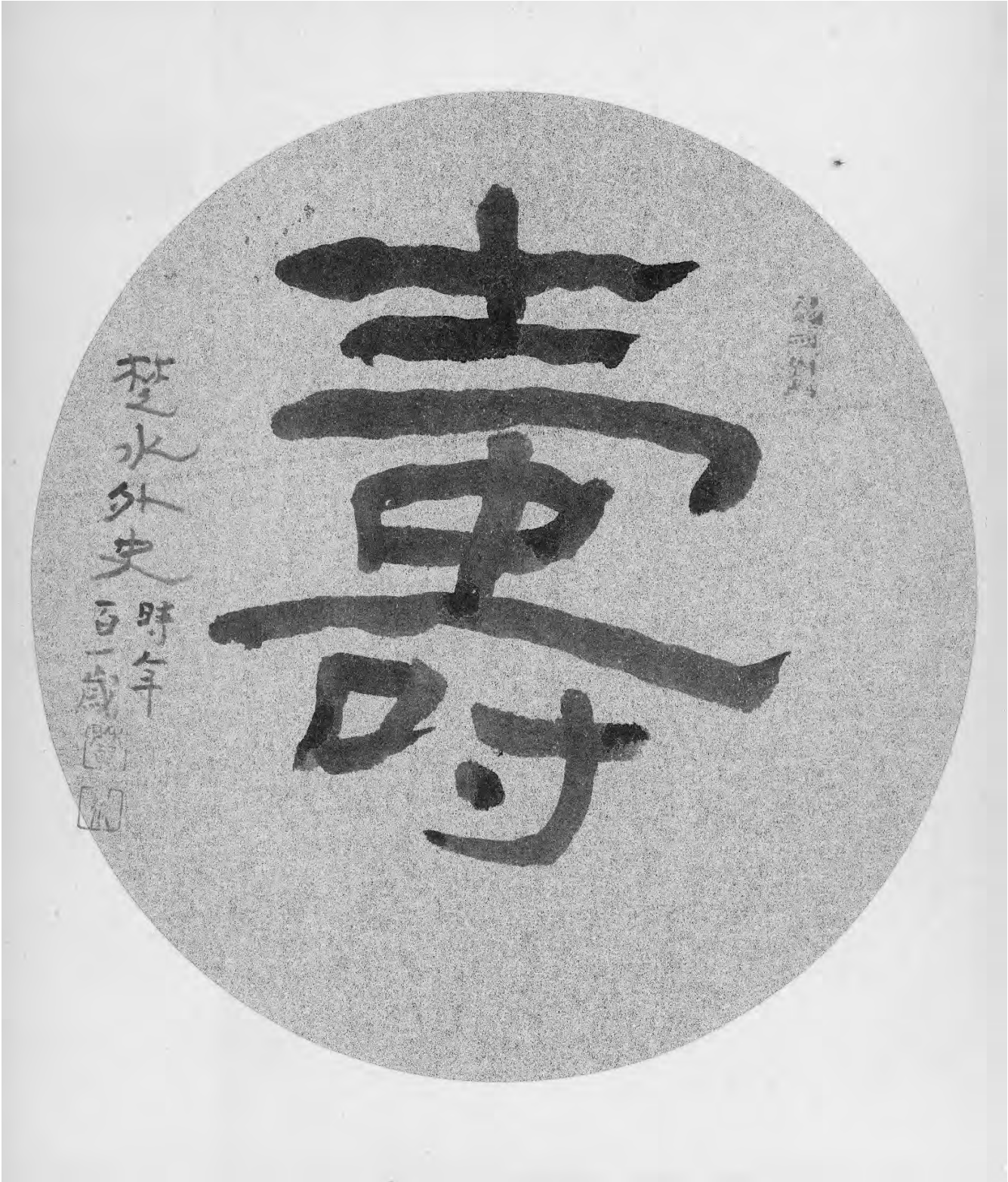


主图版① 「寿·楚水外史 時年百一歲」





「落ち穂拾い記」

⑤「寿」の一字 藤原楚水

現代

図版③ 何紹基臨張遷碑



上京して、大学で書道を学び、書学に関心を抱き始めた頃には、藤原楚水先生の講座は高齢のために終了していた。書道史に視点を向け出した頃から先生を逗子のご自宅にうかがい、色々教示を得るようになり、先生が亡くなるまで20年ほど続いた。藤原楚水先生は、明治13年(1880)の生まれで、平成2年(1990)に109歳でなくなられた。明治31年に九州から大阪の関西法律学校に入られ、その後東京で『実業之日本』誌の記者として活躍され、50代の始め頃から書道史研究に転身され、『書苑』誌を創刊、主幹として終巻まで8年余り務められ、『中国書道史』の大作等を著された。戦後は、大学でも書道史を講義されたが、80歳以後は、ご自宅で戦前に発表された著作を再整理され、多くの書道金石学

関連の著作を残されている。毛筆で手紙や色紙、半切作品を楽しんで書かれていた。水墨画も多く描かれていた。書法学習の手本としては、清末後期の何紹基の張遷碑の臨書(図版③)を好まれた。ここに示した色紙の円窓に「寿」の字を伸びやかにゆったりと書かれている(主図版①)。落款に百一歳と書かれている。今日の長寿社会でも100歳を越えた方の書は、それほど多くないであろう。最晩年にお邪魔した折に数枚の色紙を書いていた。②。「寿」字であるが、こちらには百九歳とある(図版②)。これが先生の絶筆であろう。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。

木鶏室・伊藤滋

書道芸術院

平成の群像 (2016)



「玄風」 水野春翠書



水野春翠

書と生きること

恩師・恩地春洋先生が他界されて、虚しく過ごす日々が続いています。ふと、先生の笑顔やご指導いただいた言葉が思い出されます。先生は決して多くを語りませんでした。先生の道は限りなく深い。「自分から学び、悟れ」などの言葉を想いながら、書の道に心呼びもどしています。

15年前になりました。書道芸術院の種谷扇舟先生がわざわざ大阪の春洋会書展にお越し下さり、会場で私のような者にもやさしく声をかけてくださいました。「書の線の深さは紙をつき抜けて地球の底にまで届くほどの強さだ」というお言葉を、その時はあまり理解できませんでした。以来線の鍛錬に励み、今では少し分かるようになりました。そして「書は線なり」「造形の基本は線である」という思いを強くしています。充実した線の表現

ができるようになるとその達成感と同時に生きる喜びを感じます。これこそが書の楽しみであると感じるようになりました。

「古典の臨書」の大切さも感じています。恩地先生の教えの通り、自分の眼と心で、古典から書的美を学ぼうと取り組んでいます。学べば学ぶほどその奥深さに圧倒されるのが古典の世界です。まさに「書の道は限りなく深い」ことを痛感させられます。

長い年月、書の道を歩んで来ましたが、「書の線」や「古典の臨書」などの多くの課題を乗り越えることは決して容易なことではありません。しかし同時に書の奥深さに届きそうにない自分を常に振り返ることの意味を感じるようになりました。そして書とともに今を生きる自分があるがままの姿を表現する事が大切だと思ふようになりました。

素晴らしい師に出会えたこと、素晴らしい先輩や仲間に出会えたことに感謝するのみです。

書のひろば

理事長 辻元大雲

恩地春洋先生お別れの会 大阪天王寺都ホテルでしめやかに

前号でお知らせした本院顧問、毎日書道会最高顧問恩地春洋先生のお別れの会が8月28日(日)、大阪天王寺都ホテルにて、しめやかな中に1200名余が参列し盛大に挙行された。

公益財団法人書道芸術院・一般財団法人毎日書道会・玄遠社の3者共催によって開催され、午後1時より第一部として一般献花に先立ちセレモニーが挙行された。

小林琴水氏の開式の言葉に続き、はじめに恩地春洋先生に毎日書道会から書の甲子園(国際高校生選抜書展)への長年の功労に対する感謝状が朝比奈豊毎日書道会理事長より遺族代表のご令嬢山岡扶佐様に贈呈された。続いてお別れの言葉が3団体世話人代表、毎日書道会朝比奈豊理事長、書道芸術院辻元大雲理事長、玄遠社小伏竹村顧問がそれぞれ拝読した。

その後指名献花を世話人代表、ご遺族に続きご来賓の皆様にお願ひし、献花終了後、席を移動して辻元大雲発声による献杯の後、歓談に移った。

午後1時半より一般献花をいただき、3時から玄遠社関係と分けて、多くの参列者で埋め尽くされた会場は恩地先

生を偲ぶ、心あふれるお別れ会となった。遺作4点の展示も感銘を与えた。会の運営は玄遠社小伏竹村顧問、小扇、小林琴水、稲垣小燕、飯田春香、崎井恵風各氏をはじめとする会員の皆様のご協力により滞りなく準備、運営され深く感謝申し上げたい。詳細の報告は次号にて。



朝比奈氏より感謝状贈呈

書道芸術院大分講習会盛會に

第52回書道芸術院単位認定大分講習会が8月20・21日、大分市内のレントホテル大分にて開催された。講習会場はホテル2階の壮大なコンベンションホールをお借りし、7m余りの天井高、3分割された中央部だけで講習会が行われ、食事懇親会場は右側の1/3、原拓書道史は左側を使用するなど会場に恵まれスムーズな運営でありがたかった。

講習内容は例年通り実技(漢字(竹村龍汀講師)・かな(平川峰子講師)・現代詩文書(尾形澄神講師)・篆刻(後藤大峰講師)・前衛書(三森慧香講師)そして書写(広瀬舟雲講師)を、一般教養として原拓書道史(種谷萬城講師)、書道芸術院史(辻元大雲講師)を実施、充実した内容で受講生100名余と講師陣、運営事務局合わせ130名余の参加者で盛会であった。主管は九州支局(牧泰濤支局長)。詳細は次号にて報告される。



熱氣溢れる受講会場

第68回毎日書道展東京展閉幕 地方展へ

好評を博した第68回毎日書道展は7月31日国立新美術館会場の閉幕で終了し、東京都美術館と合わせ例年を上回る入場者(約1万5千人)で盛会であった。企画展示の「今こそ臨書」も大好

評で資料としての図録発行がなかったのが悔やまれた。

本院からは中島邑水、加藤翠柳、種谷扇舟の各先生の臨書作品が出品され、計36名の先達の臨書名品で充実した展示内容であった。詳細は別掲の毎日書道展総評をご覧ください。

今後関西展を皮切りに全国9会場で開催される。ぜひ高覧を。

- ・関西展 8/3〜7 京都市美術館
- ・四国展 8/10〜14 愛媛県美術館
- ・北陸展 8/21〜25 富山県民会館
- ・中国展 8/23〜28 広島県立美術館
- ・東北仙台展 9/16〜21 せんだいメディアテーク
- ・九州展 9/21〜26 大分県立美術館
- ・北海道展 9/28〜10/2 大丸藤井
- ・山形展 10/5〜9 山形美術館
- ・東海展 11/8〜13 愛知県美術館

全日本書道連盟夏期書道大学

8月5日から7日まで、池袋サンシャイン文化ホールで開催された全日本書道連盟主催の夏期書道大学講座は連日100名余の受講生で盛会であった。

漢字は楷書(山口啓山講師)、行書(山内香鶴講師)、草書(石原太流講師)、篆隸書(井上清雅講師)、かな(岡田直樹講師)、漢字かな交じり書(室井玄鋒講師)の各氏が担当。

全日本書道連盟については本院会員に積極的に加入していただいている。院展審査会員以上は正会員として、審候以下は準会員として加入できる。加入希望者は院事務局までご連絡いただきたい。随時受付可能。

現代詩文書 (六)

畑中弄石

漢字 (六)

稲垣小燕

展覧会へ行こう

我が国最大の規模と権威を持つ第68回毎日書道展が7月6日から東京展を皮切りに11月の東海展まで全国巡回のスタートを切りました。

私たち書を志す者はこの機会を学習の場として最大限に利用すべきです。普段は同じ組織の中での展覧会で、

いわば身内同志の間柄で気分的に学習の場から遠ざかりがちになりやすい。

毎日展では自分たちの会派を離れて学べる場所、しかも最高レベルの審査会員の部屋は必ず得るものが多く、自分から求めていけば、まさに学習の宝庫です。

だから出品する側も、心構えがいつも以上に、素材・筆・墨色・サイズまで関わりを持たせて準備しているはずですよ。

今回の作品は毎日展の出品作です。大岡信さんの短詩『音楽は造型する究極の沈黙』は印象的な言葉で、短鋒筆で紙面いっぱい、墨色にも工夫を凝らして書いてみました。



大岡 信詩「音楽は造型する究極の沈黙」 畑中弄石書

21世紀の書

— 私の主張 —



手島右卿先生書「崩壊」

・大字書の可能性
いよいよ最終章になりました。自己の制作の立場から書における表現やその方法についてつらつらと述べてきましたが、ここにて「書」特に大字書の行き先、大げさに言えば未来を考えた時、芸術としての大字書が生まれた必然的な意味を再度理解する必要にせまられました。ご存知のように大字書が芸術としての位置を得たのは手島右卿先生の「崩壊」でした。漢字

外で高い評価を受けたことは、当時日本の書道界においてセンセーショナルな出来事でした。ただ、私は海外で評価を得たことにすべてを委ねているわけではありません。

民族を問わず人には通じ合う感性があり、大字書によって伝えられることを証明したことで、ここに大字書のも一つ一つの大切な要素があり、未来の可能性をもった芸術分野であると思いたりました。文字数に制限があるのでこれ以上述べることはできません。

また、一方で大字書の分野には行き詰まりがあると思われがちですが、私はそうは思いません。「印象」「心象」のところでもふれましたが、その時々歴史の中で人が深く何かに感じ、心動かされるものは百人いれば百様ありその表現もまた百様あるはずですよ。幸い書は多くの遺産を残してくれています。加えて新しいツールを見つけ開発し駆使すれば大字書による表現は無限の可能性を有していると信じて疑いません。ただそれには弛まぬ自己の精神と錬磨なしにはないのです。

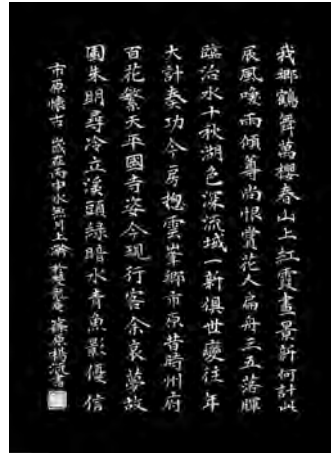
「無限」

稲垣小燕書





篠原 楊流
(千葉)



「紺紙金泥細楷」市原懐古

母校姉崎高校へ教育実習の
お願いに伺ったのが飯高和子
先生との出会いです。革新的
で素敵な授業・未知の紺紙金
泥細楷まで妹誠華共々姉高書
道の虜になりました。以来23
年かけがえのない宝物です。
漢字部審査会員を拜命し、
先生方の御指導のお陰と感謝
申し上げます。姉高書道、書
は心やれば出来る継続は力な
りの合言葉を糧に更なる精進
努力をお誓い申し上げます。
(楊流)

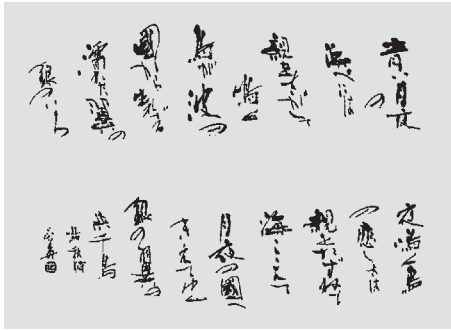


相澤 正華
(千葉)

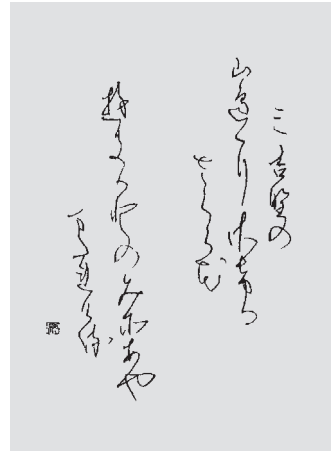
「浜千鳥」

鹿島鳴秋詩

この度、審査会員にご推挙いただき
ありがとうございます。これもご指導
頂いている鈴木漢舟先生はじめ諸先生
方、書を愛する多くの皆様に支えてい
ただいたおかげと感謝申し上げます。
私の故郷の九十九里海岸に群れ飛び
遊ぶ千鳥を思い作品に致しました。
(正華)



京 絹子
(東京)



「み吉野の…」

(古今集)

この度は、審査会員にご推
挙頂き誠にありがとうございます
でした。ご指導下さいました
下谷洋子先生に心から感謝い
たします。
この作品は、中学生の頃に
初めて覚えました古今集の和
歌です。これからも和歌や俳
句との出会いを大切に精進し
てまいりたいと思います。
(絹子)



後藤 恭
(宮城)

「鮮光」

前衛書部審査会員に昇格さ
せて頂き、大変光栄に思っ
ております。今回の作品は、半
紙という大きさの中で、でき
るだけ題名『鮮光』のように
躍動感が感じられる作品がで
きればとの思いで制作しまし
た。
今後、精一杯頑張ってい
きます。
(恭)



会 員 賞



近代詩文書部 飯沼恵鳳



飯沼恵鳳
(近代詩文書部)

6月29日、私の師匠加藤翠柳先生の18回目の命日。朗報は奇しくもこの日。作品制作のとき、不思議な空気が部屋に立ち込めた。書き終わると、すーっと風が私の中から通り抜けた。

翠柳先生と出会って今年でちょうど60年還暦の歳、新たな精進の第一歩。何も恩返しが出来ずに寂しい想いをしてきた自分。

今回、私が一番うれしかったことは、企画展示に私所蔵の翠柳先生の臨書、良寛の「ふるさと」が、中島邑水先生、種谷扇舟先生の臨書作品と同じ会場に一緒に展示。きつと、御三人の先生も私の拙作を観て微笑んでくれていることでしょう。

せなかからおされてゆれる柳かな

恵露満つ半眼微笑の柳かな

私を支えてくださった皆様に深く感謝御礼。

毎日書道展 第68回

国立新美術館 7月6日(水)～7月31日(日)
東京都美術館 7月16日(土)～7月23日(土)

会 員 賞



千葉華紅
(前衛書部)



前衛書部 千葉華紅

太田蓮紅先生に師事して32年、未知の世界であった前衛書への道を開いていただき、書く度に新しい世界が広がるような感覚に魅了され、ここまで辿り着いたと思っております。

作品を書く時、最初の1本の線に全てを集中させるあまり、気持が紙の最後まで続かないことがあります。今回は、1本の線から最後に筆を置いて心が静まる所までの気持の昂りが途切れることなく、自然で心地良いものでした。未だ、その余韻の中です。

作品の前に歩を止めて下さった全ての方々に心より感謝申し上げます、更に精進努力する決意を新たにしております。

この度の会員賞受賞、誠に有り難うございました。これも偏に太田蓮紅先生を始め諸先生方の熱いご指導、そして蓮紅社の書友の皆様を支えていただいたお蔭と心から感謝申し上げます。

第68回毎日書道展総評

辻元大雲

第68回毎日書道展は2月の運営委員会を皮切りに始動し、院役員、会員が各部担当役員などを幅広く担当し貢献した。4月中旬の事務局合同会議を経て5月下旬の鑑別、6月下旬の審査、会員賞選考などが順調に運営された。総出品点数は前年より約50点増となり、下げ止まりの傾向が見えてきた。

今回展では運営委員として漢字部種谷萬城、かな部大辻多希子、近代詩文書部田村鄭雲、大字書部石田春窓、前衛書部津田海仙の各氏、東北仙台展実行委員長を嵯峨大拙氏、会員賞選考には辻元大雲、下谷洋子財団役員のほか大字書部大野祥雲、前衛書部金井如水の各氏が本院より担当した。当審査委員などは既報の通りで、各部署での本院関係者の活躍が特筆される。

出品全作品中より選考される文部科学大臣賞には大字書部独立書人団理事長の仲川恭司氏が受賞、会員賞には本院から近代詩文書部の飯沼恵風さん、前衛書部の千葉華紅さんお2人が受賞した。お2人とも東北宮城県在住の宮城野書人会所所属であり、東北の底力を発揮された。中でも飯沼さんは第23回

展に会員昇格されており、実に40有年のご研鑽が結実したことは大いに讃えたい慶事であった。会友・公募・U23の各部での入賞、入選の成績はほぼ例年通りの成果を上げ、本院のエネルギイが大いに発揮されたことは慶賀すべきことであった。数値的な内容は下表をご覧ください。

恒例の企画展示は昨年の文房具「筆・墨・紙・硯」に続き「今こそ臨書」を主題として、毎日書道展を築き上げ支えてこられた先達の遺された古典臨書作に焦点を当て、多様なジャンルを網羅した多彩な内容での企画展示となった。臨書作品は物故された先達作家より主要役員として活躍された36名の先生方の遺された名品揃いで、本院からは中島邑水、加藤翠柳、種谷扇舟の3先生の作品が展覧された。香川峰雲、春蘭両先生には臨書作品の適当なものが見つからず断念したことは残念であった。

中島邑水先生作は「薬師寺仏光背銘」の軸作品と「哀冊」の折帖作品、加藤翠柳先生作は「良寛ふるさと」の巻子作品、種谷扇舟先生作は「雁塔聖教序」の原拓と臨書作の二曲屏風とそれぞれの先生方の持ち味が生かされた作が出品された。企画展示に併せ、毎日書道会理事監事によるギャラリートークが連日開催され、本院から下谷洋子、辻

元大雲の2名が担当、大変な反響を呼び、会場には連日參觀者が多数訪れ昨年以上に盛況であった。

東京展では例年通り国立新美術館(7/7~7/31)と東京都美術館(7/16~7/23)の両会場で開催され、入場者数は両会場とも昨年を上回る盛況であった。7月17日にザ・プリンスパークタワー東京にて表彰式、祝賀会が開催された。午前には「臨書」をテーマに五島美術館名児耶明学芸部長、台東区立書道博物館鍋島稲子学芸員、毎日書道会石飛博光理事3者による懇談会が開催され好評を博した。夕刻には書道芸術院主催の出品者懇親会が昨年と同じ芝パークホテルにて200名余の参加者で盛況、会員賞受賞の飯沼、千葉両氏を中心として入賞入選者の努力を讃え、来年に向けての更なる健闘を誓い合った。

本展は東京展の後、関西展(京都)を皮切りに11月中旬の東海展

まで全国で展開される。各開催地では作品展示と共に顕彰式、祝賀会、作品解説会、揮毫会などがそれぞれの地区の特色を発揮した内容で展開される予定。各開催地での役員などを本院関係者が多数活躍され大いに貢献していることもご協力を感じ申し上げ総評としたい。

第68回展出品数

書道芸術院	漢字		かな		近代詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
本年度	207	195	118	157	527	215	0	75	458	1,952
前年	239	209	130	154	542	205	0	91	455	2,025
増減	-32	-14	-12	3	-15	10	0	-16	3	-73

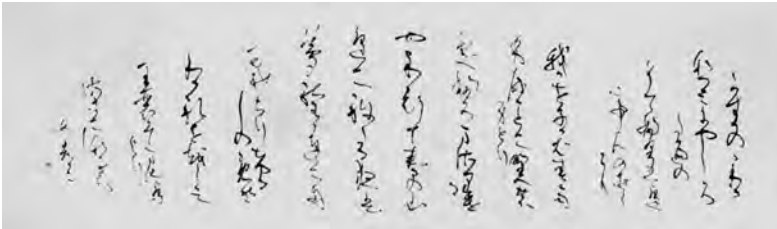
第68回展書道芸術院受賞者数

賞名	漢字		かな		近代詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
会員賞					1				1	2
毎日賞	2	1	1	2	3	2		1	3	15
秀作賞	3	2	3	1	7	4		1	8	29
佳作賞	6	6	2	6	16	8		2	14	60
U23毎日賞					1				1	2
U23新鋭賞										0
U23奨励賞		1	1			1			1	4
合計	11	10	7	9	28	15		4	28	112

毎日賞



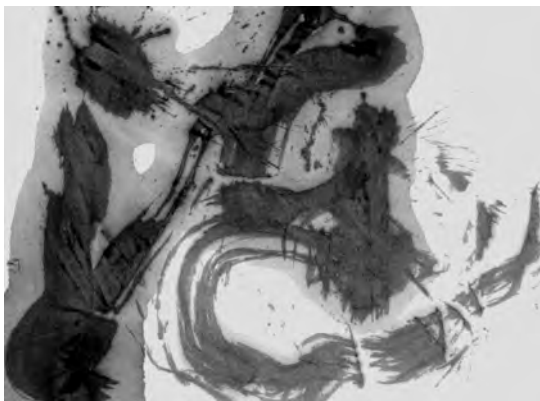
漢字部Ⅱ類 山田 翠香



かな部Ⅰ類 都丸 みどり



かな部Ⅱ類 中川 紅蘭



大字書部 小林 青峰



漢字部Ⅰ類 一森 映泉



漢字部Ⅰ類 高山 紅苑

毎日賞



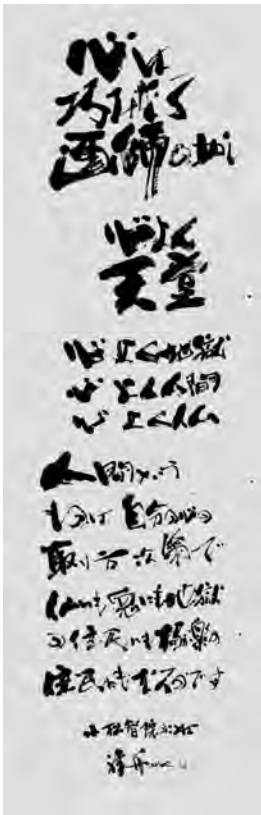
近代詩文書部 大野清玉



かな部Ⅱ類 西巻サト子



近代詩文書部 岩崎陽光



近代詩文書部 波多祥舟

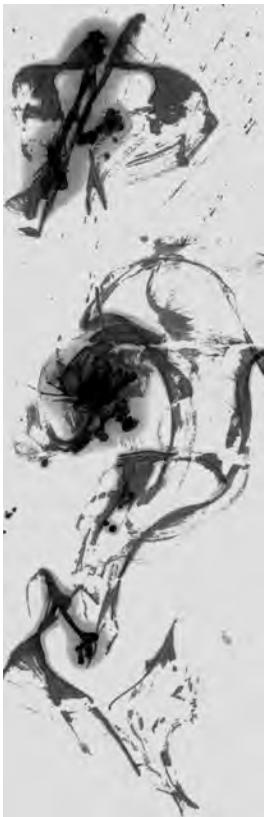


前衛書部 坂井初江



大字書部 衣田琴草

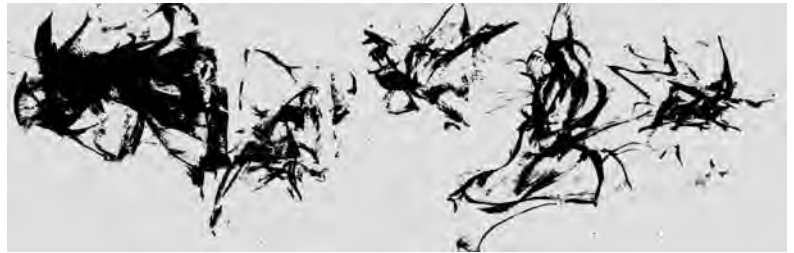
毎日賞



前衛書部
吉田 恵也



刻字部 大沼 樵峰

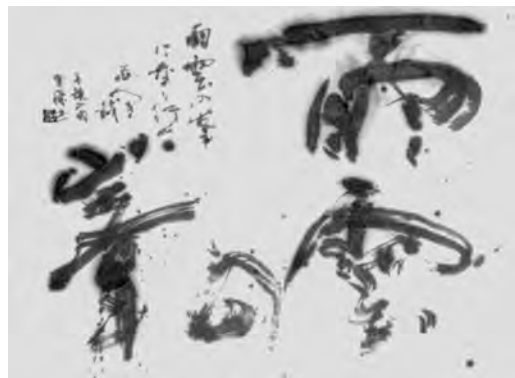


前衛書部 佐藤 友恵

U23毎日賞



前衛書部
相内 沙莉



近代詩文書部 後迫 里保

秀作賞受賞者

佳作賞受賞者

刻字部

赤羽蘭径 葛西楊舟

・漢字部 (I類)

小川白柳 影山扇葉 西古春堂

・漢字部 (II類)

長峯万扇 森田藤谷

・かな部 (I類)

京 絹子 治田芳江 松本泰泉

・かな部 (II類)

藤村昌子

・近代詩文書部

大西香蘭 小野幽景 金濱珀燐
紺野遊山 坂本龍水 菅原房江
山内松吾

・大字書部

朝倉希代子 寺前華扇 東京春城
三沢明扇

・刻字部

佐藤紫水

・前衛書部

浅野彩紅 岩上郁子 小此木白洋
金井みどり 佐々木秀華 塚本真仙
藤原紅雲 星野成美

・漢字部 (I類)

渋谷愛華 田口鈴水 竹浪叙舟
西川翠嵐 藤井龍仙 山崎皐月

・漢字部 (II類)

大山和歌子 香味祥誉 渋谷螢江
藤原小翠 布施瑞弘 遊佐柏葉

・かな部 (I類)

高橋正子 戸来益江

・かな部 (II類)

北村欣子 関口ヤヨエ 知野久美子
利村郁子 星野栄子 大和由紀江

・近代詩文書部

天野白扇 石野恵風 井上雲開
臼井真理 神本星洗 栗原由紀
坂本蓉花 佐藤華炎 杉山枝苑
銭谷雪蘭 高木竹香 千葉白苑
長島僊雨 村上春溪 遊佐香風
芳村順子

・大字書部

池美恵子 一谷春窓 小田雅則
佐野文子 永見史篁 藤原聖美
松山清風 向井翠窓

・前衛書部

尾山美知子 梅山久子 加納順子
工藤史音 齊藤白馬 佐藤成美
下沢博美 白河真帆 鈴木恵風
畠中成山 鵜 匡子 丸橋華葉
大和愛香 柳町真穂

U 23 奨励賞

・漢字部 (II類)

相内沙莉

・かな部 (I類)

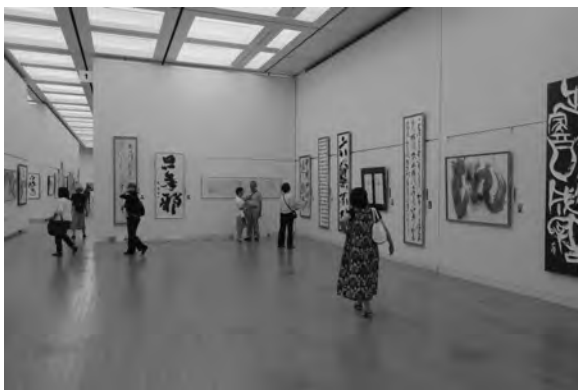
大崎友里絵

・大字書部

堀尾有貴

・前衛書部

千葉友紀子



会場風景



辻元理事長によるギャラリートーク

薦季直表 (魏・鍾繇)

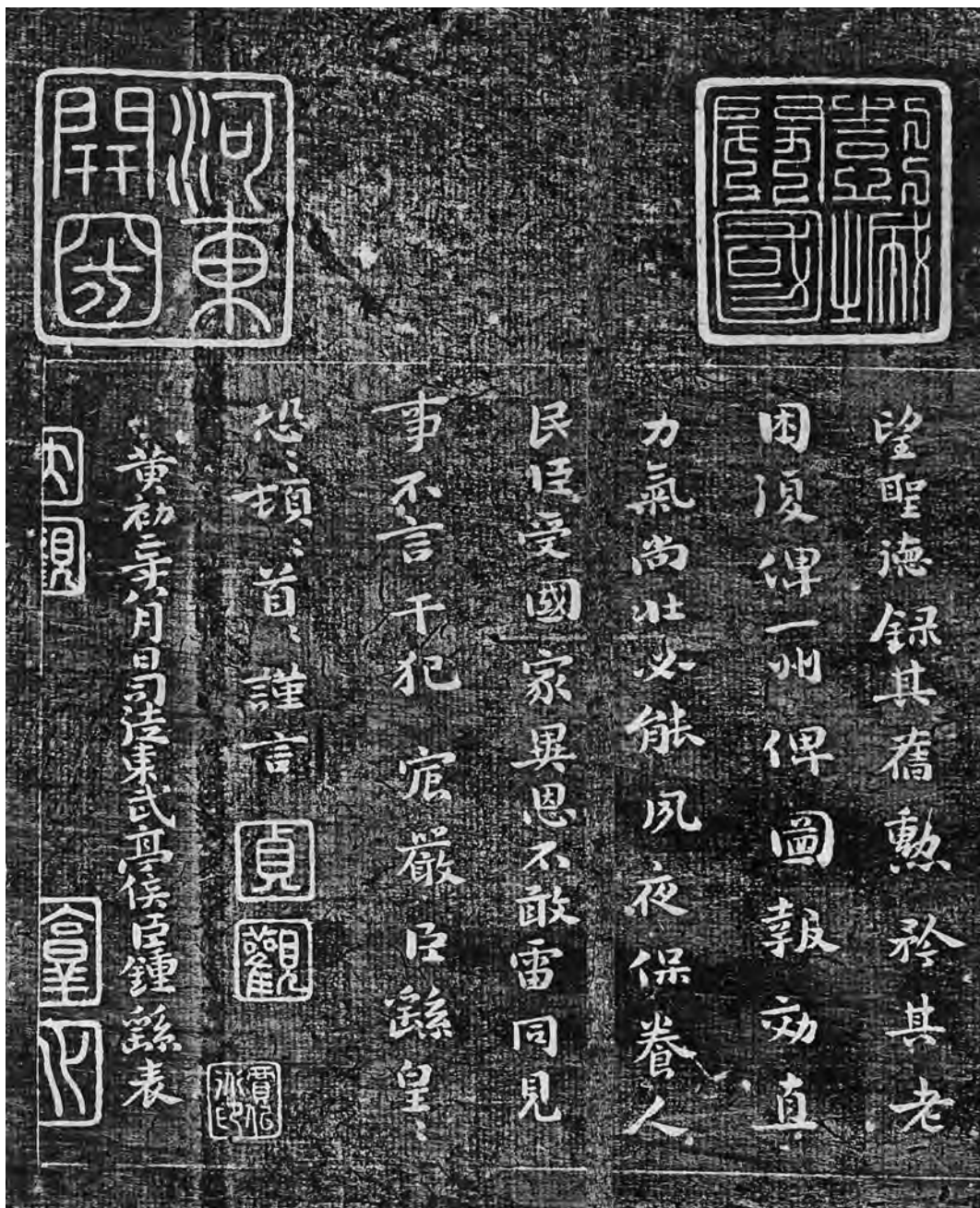
③

漢字研究部臨書課題

Ⅱ (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

Ⅱ (毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 当該古典の左記掲載部分以外も可。



真賞齋帖より (85%縮小)

〈釈文〉

望するに、聖徳もて其の旧勲を録し、其の老困を矜れみ、一州を復せしめ、報効を因らしめよ。直は力氣尚お壮なり。必ず能く夙夜人民を保養せん。臣は国家の異恩を受く、敢えて雷同せず。事を見て言わざれば、宸嚴を干犯せん。臣繇皇恐皇恐、頓首頓首、謹んで言す。 黄初二年八月日、司徒・東武亭侯・臣鍾繇表す。

〈解説〉

三国時代、魏の鍾繇(151-230)は、秦の李斯、漢の蔡邕・張芝と並んで、王羲之以前の中国書道において極めて著名である。また、孫過庭の「書譜」の冒頭にも「夫れ古より書を善くするものに漢魏に鍾・張の絶あり、晋に二王の妙を称す」と、六朝以前の四大家の一人に挙げられている。

薦季直表の他に鍾繇の書として「宣示表」「賀捷表」「力命表」「墓田丙舍帖」などの細楷が、石に刻されて法帖となつて伝えられている。(編集部)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨 (押印のみ可)

古筆鑑賞

(150)

高野切第一種
（伝紀貫之）

(3)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

〈よみ〉

むめのかをそでにうつしてとらめては
よみびとしらざる
はるはすぐともかたみならまし
そせい

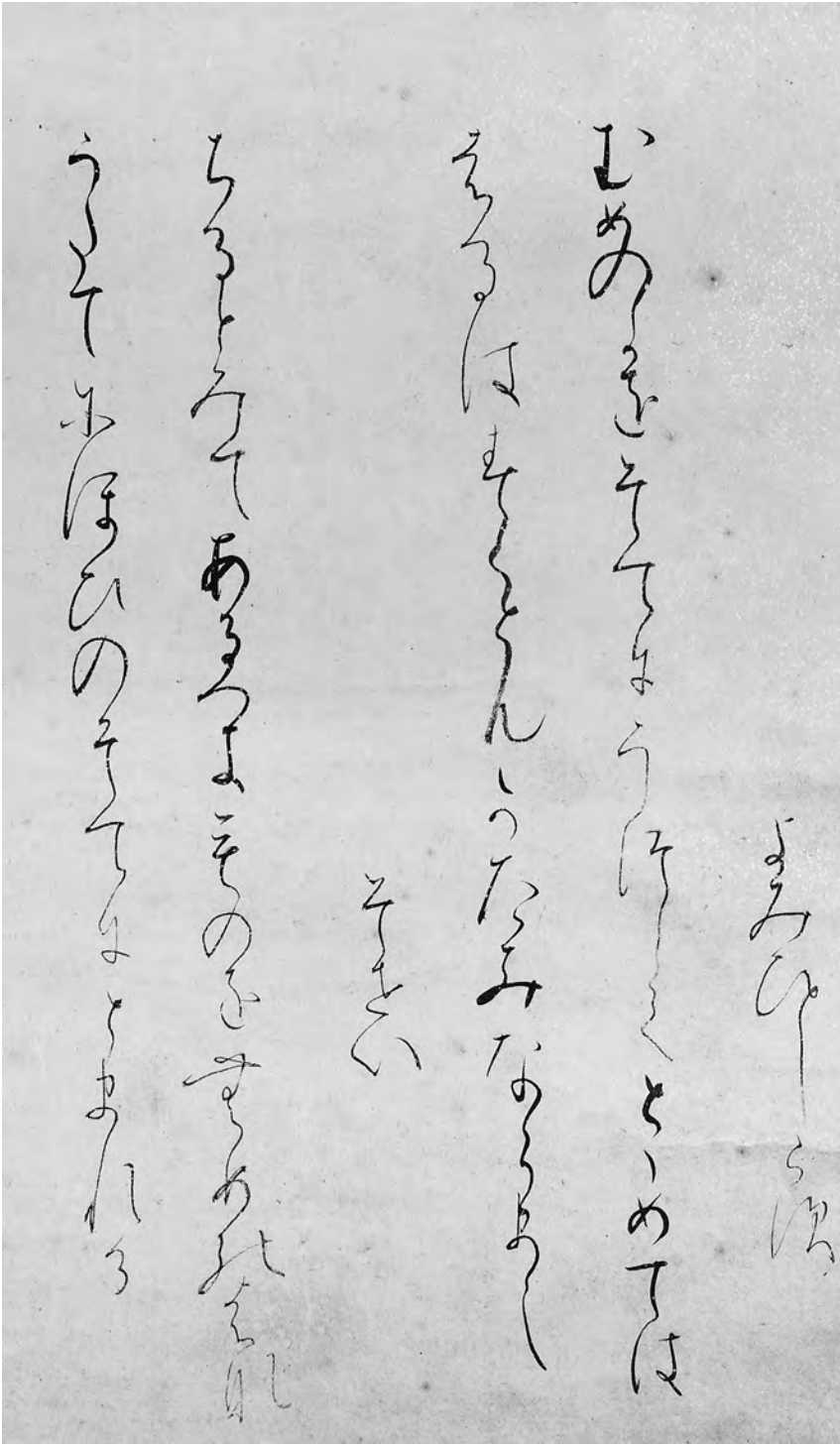
ちるとみてあるべきものをむめのはな
うたてにほひのそでにとまれる

特別研究部臨書課題

（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）
（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

かな研究部臨書課題

別紙を裁断して貼付も可。半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）



（出光美術館蔵）

〈解説〉

高野切の筆者は、古来紀貫之（861?~945）と伝承されてきたが、11世紀中頃の3人の能書が寄り合って「古今和歌集」の序および全20巻を分担執筆したものである。

高野切の現存遺品を書風別に見ると、

- 第一種：巻一・九・二十
 - 第二種：巻二・三・五・八
 - 第三種：巻十八・十九
- を描写したと推定される。

この3人の中で、最初と最後および全巻の表紙の題字を書いたとされる高野切第一種の筆者が筆頭の執筆者で、もともと能書として地位の高い人物と考えられる。

高野切第一種は、数ある名筆の中でも類を見ない品格を誇っている。この筆者は、まさに当代随一の能筆であったことをうかがわせる。

（編集部）

『古今和歌集』巻第一より
※掲載図版は76%縮小。 13

漢字規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

半田藤扇選書



游魚動 緑荷 よみ (游魚緑荷を動す)

書体 自由

習い方解説 (六)

半田藤扇

游魚動 緑荷
(游魚緑荷を動す)

池水にたわむれる魚が緑色の蓮葉をうごかす。

最後になりました。行書で明快な躍動感のある作風に取り組みました。丁寧な書きぶりを入れ、筆致豊かに表現が出来ればと……。

5文字が皆、画数が多いので、リズムカルな運筆を心がけると明るさが出て透明感も加わる作となると思います。

私は、白の中で黒が引きたつことを、常に想いながら書作をしています。難しい問題で一生の課題です。

※墨色も大切です。

今回のような雰囲気のある作品を淡墨で書くのも、叙情性が加わり魅力的な作品になると思います。上記は濃墨です。

漢字規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

竹本龍汀選書



清秋竹露深

よみ (清秋竹露深し)

書体 楷書

習い方解説 (六)

竹本龍汀

清秋竹露深 (清秋竹露深し) (曹學佳)

清き秋の時候にしたたる竹の露は深い。

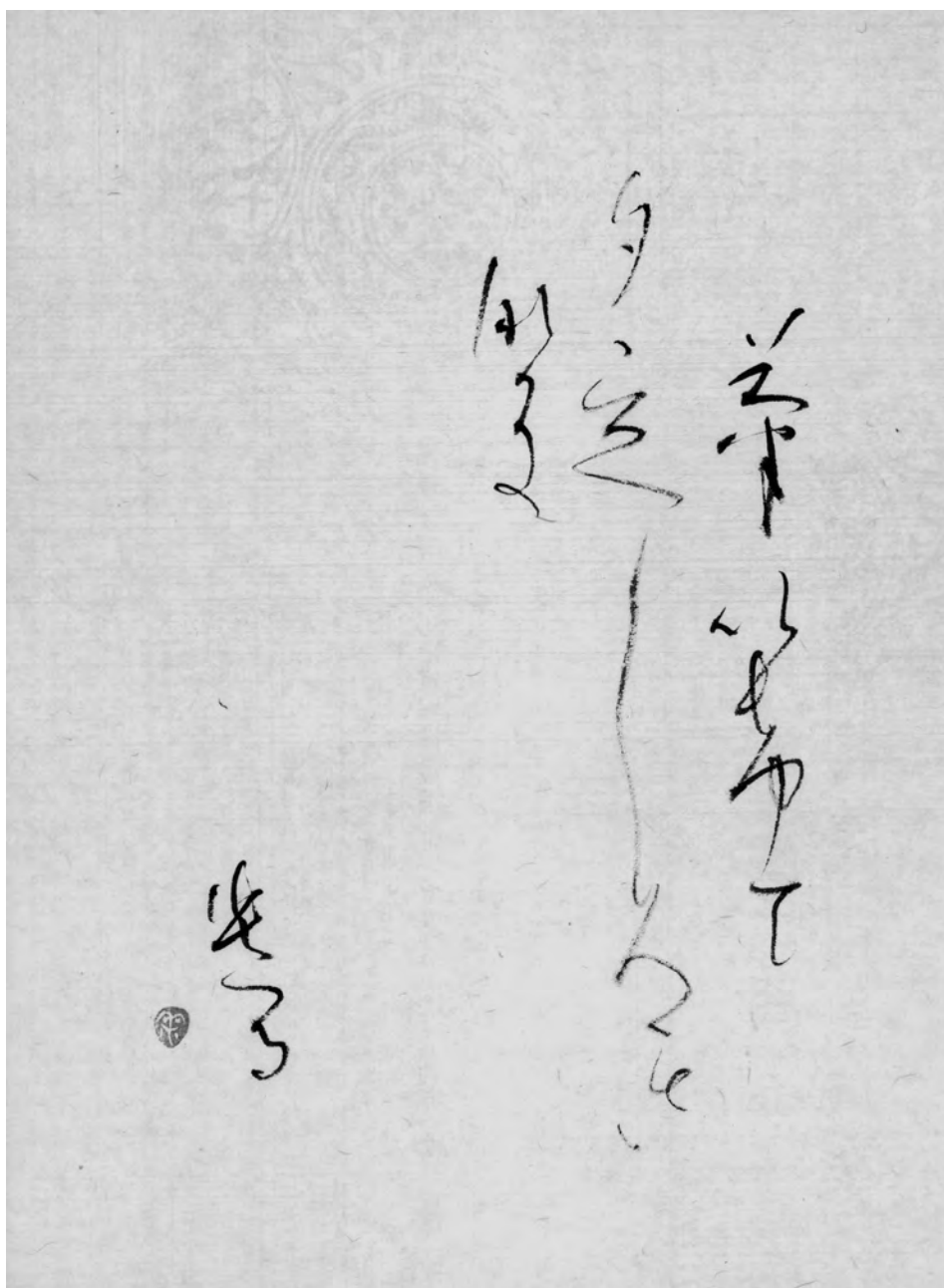
締めくくりとして今回は書聖と称される王羲之を取り上げることとした。

王羲之の楷書の主なものは楽毅論、黄庭経でいづれも小楷である。今回は王羲之の楽毅論と光明皇后が臨書した楽毅論を参考にした。光明皇后の楽毅論は穂先の利いた筆でかなり大胆に書かれている。強弱抑揚墨色の変化が激しく、一見すると楷書とは思えない。形臨というより筆意筆脈が強調された意臨である。意臨ゆえに王羲之と対比して見ると王羲之の楽毅論がより深く見えてくる。

課題の手本は光明皇后の楽毅論の力強さと迫力を残し、極端な墨色の変化と強弱を整えて王羲之の楽毅論に近付けて楷書に見えるようにした。結果、楽毅論にヒントを得た自運になった。

かな規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

下谷洋子選書



よみ方 菊活(以)け(希)て夕立白(しろ)き中(那可)に(尔)居(遣)る

創作

習い方解説 (六)

下谷洋子

菊活(きく)けて夕立(ゆふだち)白(しろ)き中(なか)に居(ゐ)る

(渡辺水巴)

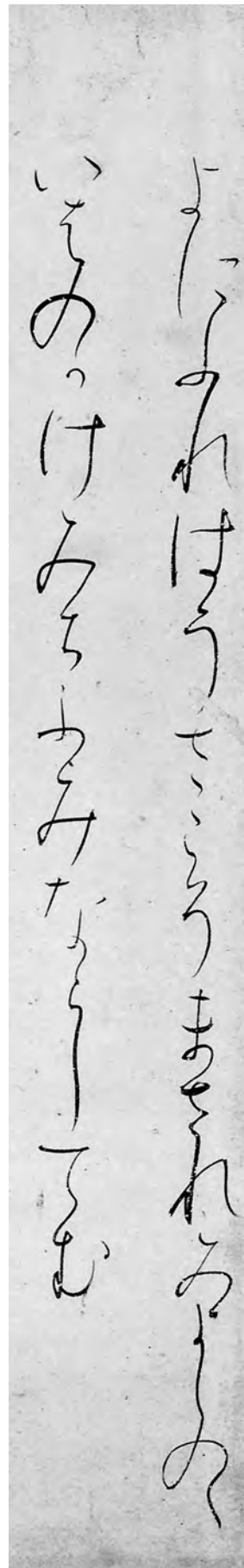
今年の毎日展の企画展示は「今こそ 臨書」でした。先人かな作家は8人、その臨書は形臨に意臨、拡大臨書もあって大変意義深いものでした。

かなの臨書は、公募展などでは原寸臨書、料紙もその古筆の用紙で書くことが求められますが、普段は拡大であったり、用具用材も色々な物を用いて書くのも一案かと思えます。とにかく自分の血肉にするための臨書、創作に繋がれるものでなければいけません。そこで日々の臨書は、たくさんかくのではなく今回述べてきたように、一行の中の動きや連綿の特徴・線質・余白など、書く前に観る、必ず美しいバランスがあります。その美しさを知らなければ、自分で創作しても独りよがりになり品格を欠きます。かなの臨書は創作とかけ離れている傾向にあります。技術向上だけでなく、古筆が何故美しいのかを知って、作品に活かせるようになりたいですね。

かな規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方

よにふればうさこそ(曾)まされみよしのゝ
いは(者)のか(可)けみちふみならしてむ

かな条幅規定 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

庄司紅邨選書



よみ方 頂上や殊(こ東)に(耳)野菊の吹か(可)れ(連)居(を)り(利)

創作

習い方解説 (三)

庄司紅邨

頂上ちやうじやうや殊ことに野菊のぎくの吹ふかれ居まり

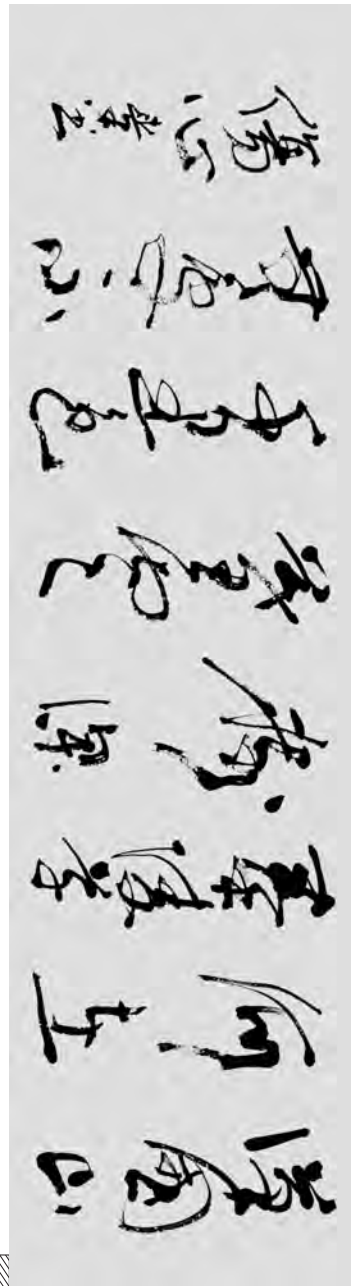
(原 石鼎)

秋にむけて山の風情を吟じた句。きびしい自然には野菊がふさわしい。のびやかに二行書にまとめました。「頂上や」を一行にし、三行書の作品にするのも表現のひとつです。いろいろと構成の変化を試みて下さい。

※たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

飯田春香 選書



漢國山河在 秦陵草樹深 暮雲千里色 無處不傷心
 (漢國山河在り 秦陵草樹深し 暮雲千里の色 処として心を傷ましめざるは無し)

(荆叔「題慈恩塔」)

書体||自由

出品券
 貼付位置

漢字条幅規定 秀級以下 【十月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

尾形澄神 選書



幽閑少是非 (周弼)
 (幽閑是非少なし)

書体||自由

習い方解説 (六)

飯田春香

漢代から今に残るものはこの山河のみ。秦の始皇帝の陵も草木が生い茂り…。唐王朝の栄枯盛衰の無常観を詠んだ詩。

今回は横書きの勉強です。縦書とちがって伸びやかさと横への広がりを表現するのが難しいと思います。1行に3字と2字を組み合わせた構成にしましたが色々工夫してみてください。

※よこ形式に限る

習い方解説 (六)

尾形澄神

塵俗にかかわらぬ静かな境地にいるから事の是非が少ない、の意。昨年10〜12月の漢字研究部・祭姪文稿に見られる重厚な線質を求めました。藏鋒で穂先が画の中心を通ることを意識、堂々とした存在感で紙面を制す気概で書きました。



眼

それはレンズ

まばたき

それはわたし

のシャッター

髪でかきまらた

小さな小さな

暗室もある

だからわたし

カメラちゃんか

ふらふらげたい

茨木のり子詩

舟雲かく

用紙はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体は自由

習い方解説 (六)

広瀬舟雲

最終回は、字数がちよっと多い詩の場合どのように書いたらよいのかを述べます。詩を書く場合、部分を抜き出して書く方法が多いですが、時には全文を書きたくなるものだってあります。その場合、文字の大きさを小さくして行数を増やす方法が一般的ですが、今回、少し工夫し、詩の前半と後半を上下2段に分けて書いてみました。上段を少し大きめな文字に、下段を細字にして変化をつけてみました。詩の内容と書のイメージを視覚的に融合させた現代詩文書で時々用いられる手法をペン字に応用してみた一例です。皆さんは、いつものように書いてもよいし、更に創意工夫を凝らして書いてみてもかまいません。

詩人の茨木のり子さんは、かつて西東京市に住んでおられました。鋭敏な感性で心に響く言葉を紡ぐ方でした。

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

ホープ作品 各部総評

NO. 663

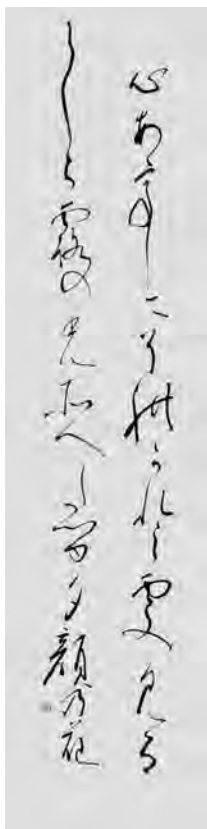
漢字部 師範 井ノ口春峰

全体構成まとまりよく、濃墨による筆致も潤渾のバランスも適切で安定した作。落款やや窮屈か。
◎漢字部総評 上級5文字表現やや小ぶりに萎縮した作多し。紙面を効果的に生かす工夫を。下級4文字表現も同様。(大雲評)



かな条幅部 四段 白井 真理

やや小ぶりだが、全体のバランスに落着きを見せ、無理のない流れが温かい。手本を巧く咀嚼する。
◎かな条幅部総評 変体がな亭・禮・登・所・漢字の露に顔、誤字が多々。思い込みや曖昧さはやめ確認の習慣をつけたい。(洋子評)



前衛書部 特選 岩上 郁子

感性豊かで切れ味、余白共にすばらしい作となっている。墨色等の配慮により更なる発展を望む。
◎前衛書部総評 多様な作品が出品され頼もしいが、もう少し墨色紙等に細心の注意を。(仙草評)



漢字条幅部 師範 山崎 皐月

濃墨での潤渾の変化が美しく、奥行の深い作となった。熟達した筆法で上質の線性。余白も綺麗。

現代詩文書部 特選 柿沼 彩香

安定感のある構成。字形も横長で懐広く、程好い空間美を放っている。落款印無いのが残念。
◎現代詩文書部総評 現代詩文書は自由な創作であってほしい。素材も自撰が望ましい。(素雪評)

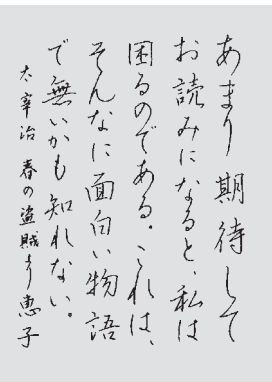


◎漢字条幅部総評 上級は、参考手本に拠る作が大半だが、創意溢れる作は努力苦心の跡が窺え好感が持てる。(萬城評)



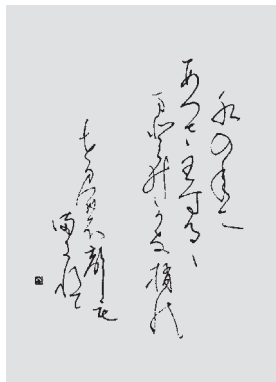
ペン字部 師範 鶴田 恵子

美しい字形にリズムと懐の広さを感じられる。連綿も自然で布置まで見事に統一感溢れる温雅な作。
◎ペン字部総評 限られた紙面にどう配置し、美しく表現するかがポイント。特に上級者は更に日頃の研鑽を望む。(和楓評)



かな部 師範 松田ち代子

大胆で滑らかな運筆の展開する世界は出色。後半は特に魅力あり。前半の大振は再考の余地ありか？
◎かな部総評 参考手本から離れた作が少なく残念。上級者は創作を意識すること。変体がなの井と支に誤字多出。確認を。(明子評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

前衛書

(玉州)

角張芳蘭



角張芳蘭書

180×45cm

「閃光」

◆瞬間的に躍動する筆致が鮮烈な印象を与える作。下部ややもたついた感がある。更に努力工夫を。
(大雲評)

◆アップテンポの潤渾で上から下への流れが無理なく表現され素晴らしい作品。
(慧香評)

◆瞬発力のある運筆に感動。躍動感あり生き生きしている。程よく滲む墨色が魅力的。
(東舟評)

◆上部は筆が大胆に躍動し、中部は濁線が柔かく、下部は静かに鎮まる。動と静の変化が魅力的な構成。
(萬城評)

現代詩文書

(大雲)

神谷雲卿



神谷雲卿書

55×172cm

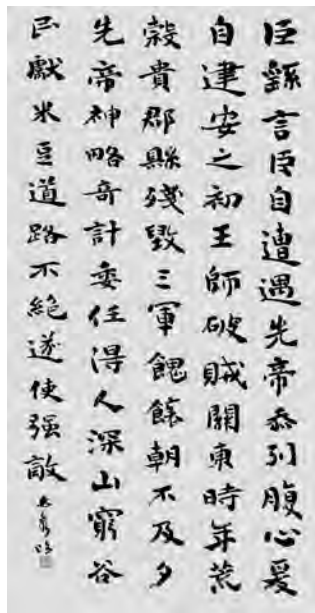
◆潤渾の変化を巧みに表現し、存在感ある雄大さが快い。行間に余白を大きくとり、全体をよくまとめている。
(東舟評)

◆淡墨が美しい。蔵鋒で深味のある線に豊かな表情が見られ惹かれる。横への筆勢が安定感を演出。
(萬城評)

「遠藤千鶴羽句」

(大雲評)

「薦季直表」



136×70cm

臨書

(大雲)

阿部恵泉

◆鍾繇の温和で淑やかな風趣を捉え、着実に臨書した。原帖に對する真摯な姿勢が一点一画に窺える。
(萬城評)

◆原帖の特徴をよく捉え、全体構成も無理なく着実な臨書作。柔らかな筆致の中に骨格の確かさあり。
(大雲評)

◆鍾繇の味わい深い線質が生き生きと表現され行間・字間も十分となり全体の構成もよい。快作なり。
(慧香評)

◆原帖をよく理解し、温かみある臨書作。字間行間も計算し、紙面構成の見事な作品。
(東舟評)

阿部恵泉臨

現代詩文書 (加美) 小川祥燕



小川祥燕書

61×180cm

「山村暮鳥の詩」

◆上下の余白を効果的に生かし、潤渾の変化がリズムミカルに横展開する。明るさと詩情の豊かさが魅力。
(大雲評)

◆下部に余白を充分に取り、上部はなだらかな山型の構成が明るい。「夢を咲き」が輝いて見える。
(萬城評)

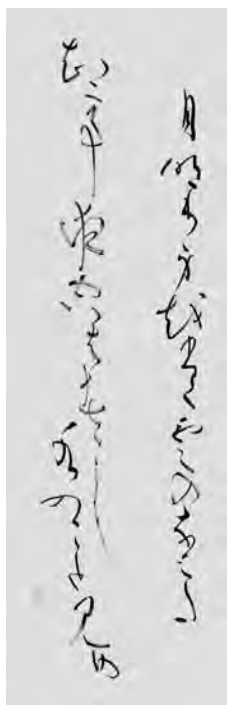
◆減り張りの利いた筆致でリズムミカル。濃墨で重心を上部に置き、下部の余白で一層明るい作となった。
(東舟評)

◆上下の余白を限界まで広くし、紙面の世界を大きくする効果を生む。行のリズムを止めずに動きが楽しい。
(慧香評)

かな

(松延)

藤原三枝子 「月明り」



171×54cm

藤原三枝子書

漢字 (大雲) 江本興舟



江本興舟書

60×179cm

「漢詩句」

◆軽快な筆法、明るく爽快な線が素敵。余白も充分で明るい。「帯び」字の渴筆が効果的で新味溢れる作。
(萬城評)

◆やや硬目の筆によるシャープな線と破筆の効果がリズムを生み、余白の鮮明さと共鳴し、爽快な作。
(大雲評)

◆柔軟な筆さばきで、物言うがごとくの運筆は見事であり、見応え十分の仕上りになった。
(慧香評)

◆運筆を大胆に楽しんで書いている様子。多彩な線質で全体の調和もよい。破筆の「帯」に目を奪われる。
(東舟評)

◆技巧的でなく、ごく自然に書かれた温みある作。2行目の墨色同一なので変化あれば更に映えるかと。
(東舟評)

◆やや字形をひきしめ、余白の効果を生かす。後半の渴筆部の動きがリズムを生み、爽快な作となった。
(大雲評)

◆静かで淑やかな書き出し、連綿を少なく、渴筆部は放ち書きが主。溫和で心静かな境地が生む書か。
(萬城評)

◆ゆったりとした清々しい作。2行目の渴筆部が少し多い気もするが全体として見ればそれは隠れた。
(慧香評)

創作の部(61点)	漢字	2点
かな	1	2点
現代	1	27点
篆刻	0	0点
前衛	1	26点
臨書の部(30点)	漢字	26点
かな	4	4点
総出品点数	91	点

〈特選候補者〉	たか 浜野 永童
「漢字」	千葉 竹浪 叙舟
「創作の部」	大雲 佐藤 希雲
大雲 官原 香扇	八街 石橋 翠峰
白珠 相内 珠莉	書泉 西卷 サト子
「かな」	奥田 小林 純風
「現代詩」	玄穹 千葉 紅雪
もく 森田 藤谷	大雲 小川 白舟
八戸 市川 紫泉	青蓮 大町 菜円
「前衛」	秀水 坂井 初江
紅瑤 金井 みどり	白琉 田子 恵琉
紅瑤 佐藤 成美	「臨書の部」
「かな」	千葉 松重 翠景
光昭 嶋 由香	

漢字研究部
(薦季直表)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



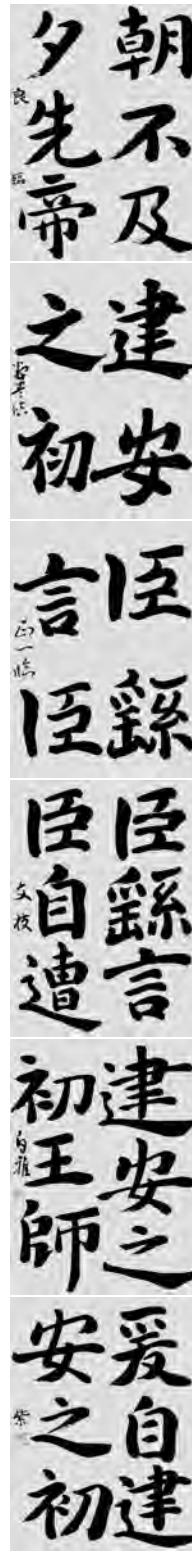
葛 恵美

漢字研究部 特選 葛 恵美
この古典の特徴である隸意を帯びた横広の字形、行書体に見られる用筆といった点を見事に捉え表現しています。また、縮まりのある線の中に、落着きと温もりをあわせもった錬度の高い臨書作品です。

◎漢字研究部総評

今回課題として示された部分は、ほぼ鮮明に見ることができた為でしょうか、誤字は殆

んどありませんでした。秀作揃いで、入選できなかった作品の中にも多くの秀作が含まれていました。ただ、注意したいのは、4文字を書かれた方の作品の中に文字が小さすぎたり、逆に紙面いっぱいに大きすぎる作品も目につきました。余白を生かすことも大切かと思えます。その他、細楷の臨書としては線が太すぎて重い作品も気になりました。



良鶴 正一 文枝 白紫



由未子 桃華 幸枝 幸子 民秀 華子 雪篁



博美 千環 美千 祥風 久美 芳

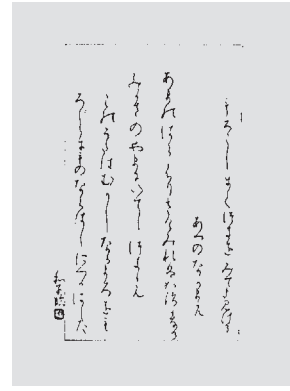


幸子 良子 登喜 江彩 玄和 美和

かな研究部
(高野切第一種)

選評 佐藤希雲

今月のホープ作品



境野和子

雅綾千

京洋良

美山翠

裕幹香

裕美峰

子子泉

艸房陽

美生舟

澄こ 春だ	花和 泉舞	椿翠 松	玉松 秀	有秋 雲	大秀 明	高崎 祥	華会 雲	耕正 雲	石習 雲	高大 井	一宮 宮	福玉 松	秀明 松	竜泉 明	蒼葉 陽	若陽 葉	蒼葉 陽	こ葉 陽	う葉 陽	紅葉 陽	清葉 陽	境野 和子
小大 石澤	鶴村 今村	伊藤 美悦	青木 松月	石川 森相	長根 板垣	永田 時枝	伊藤 弘英	松丸 愛清	櫻田 清和	磯田 雅綾	長谷 川千	川東 京子	若東 京子	後山 美山	込山 美山	込山 美山	加藤 裕香	下地 裕香	飯田 裕香	須田 裕香	須田 裕香	須田 裕香
輝星 琴祥	琴貴 泉	貴悦 月	葵郷 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子	洋美 子

かな研究部成績表

生さ 大つ	硯菊 水月	朝川 川	玉墨 宣	華宣 仙	青蓮 珠	桜草 大	生高 峰	香高 月	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大	正華 大
新明 井石	宮宮 澤崎	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川	宮宮 崎川
翠麗 子	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋	草英 秋

選外158名氏名略